コメント

尹　紹亭

東アジアの犂－日韓両国学者の犂に関する３報告へのコメント

神奈川大学ＣＯＥプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第２回国際シンポジウム（2006年10月28、29日）では、第１回シンポジウムに続いて河野通明教授の主宰で東アジアの犂に関するセッションが開かれた。前回とは異なり、今回のテーマは「犂の形態比較から東アジアの民族移動に迫る」である。このテーマは、河野通明教授の「文化は必ずしもすべて自然環境に規定されるわけではなく、民族の移動によって生まれる文化の伝播現象を重視すべきである。その民族移動の歴史は犂の形態比較から解明できる」という重要な学術的視点を基に設定された。このセッションには日中韓３カ国４人の学者が参加したが、河野通明教授が言及したように、３カ国の犂の研究者が一堂に会するのは初めてのことである。異なる国の研究成果を報告することは、シンポジウムの議論を深め、共同研究の基礎を強化するうえで、極めて大きな意義がある。４人の学者の分担は、渡部武教授が中国の犂について、金光彦教授が韓国の犂について、河野通明教授が日本の犂についてそれぞれ報告し、私がそれに対しコメントすることである。以下３人の先生方の報告について卑見を述べてみたい。

１．渡部武「中国の伝統犂とその技術移転」について

渡部武先生の報告「中国の伝統犂とその技術移転」は、中国の犂の誕生と発展について述べた力作である。先生は序論で、中国の伝統犂について体系的な研究を行った人は極めて少ないと述べ、体系的かつ深く研究した研究者として天野元之助、周昕、尹紹亭の３人を挙げている。しかし、中国の犂の研究については、渡部武先生の名前も挙げぬわけにはいかない。先生はさらに「雲南大学の尹紹亭教授は、多くのフィールドワークを行い、考古学および歴史文献研究の成果を取り入れ、すぐれた研究を発表している」と述べているが、こうした評価は私より先生ご自身に向けられるべきものである。私は1980年代初頭に焼畑農業の研究に着手し、農具など物質文化に関心を持つようになった。渡部武先生は1987年に初めて雲南を訪問され、その際に漢代の画像石に描かれている犂に関する研究論文を私に下さったが、私はその論文から大きな啓発を受けた。また1990年代前半に、私は先生が主催するフィールド調査に２回参加させていただいたが、それは私の研究に大いに役立った。多くの研究資料を得ただけでなく、先生の学問に対する厳しい姿勢と緻密な調査方法から大きな影響を受けた。その意味で、渡部武先生は犂の研究における私の師と言える。

渡部武先生の報告を拝聴し、私は以下の点に大変深い印象をもった。

① 中国における犂の誕生と発展のプロセスを明晰に整理している。

② 考古学資料、歴史資料およびフィールド調査に基づいた、石犂、青銅犂、漢代の２種類の犂型、牛耕、嶺南犂の誕生などに関する論述は、歴史を踏まえ確かな根拠に基づいたもので説得力がある。

③ 北方で形成された乾地農法の技術は、後漢時代から徐々に嶺南地方に伝わり、犂耕も北方から嶺南地方

に伝来したという斬新な見解を提起している。

④　犂の誕生と発展の問題が歴史的背景（社会、政治、経済、戦争、土地制度、法律、租税、移民）と科学技術史的背景（銅、鉄、鋼の発明と普及、農業技術の発展）の中で考察されており、このような総合的な研究は少ない。

⑤　中国の犂の起源について、西アジア起源と中国起源という２つの見解を紹介し、これは今なお未解明の問題であると述べている。これは研究の視野を東南アジア、南アジア、西アジアひいては世界全体に広げ、自国にとらわれた客観性を欠く研究をすべきでないという中国の学者に対する指摘であろう。

以上の５つの論点から、渡部武先生の報告が中国の犂の研究に重要な観点を示していることが分かる。私自身も非常に多くの啓発を受けた。先生とお会いできる機会が少ないので、この機会にいくつかの問題についてご教示いただきたいと思う。

先生は、中国の古代犂（正確には漢代犂）は２つのタイプに分かれ、地域分布も明確であるとし、方形枠型犂は陝西、甘粛、内モンゴル一帯に、三角枠型犂は山東および蘇北（淮河以北の江蘇省北部）地方に分布していると述べている。また、「中国古代の犂耕の発達と犂の改良は、主として秦嶺－淮河線以北の地域で展開された。戦国時代から漢代にかけて、江南と嶺南地方は未開発の土地が広がり人口も希薄で、“火耕水耨”と称される農法で水稲栽培が行われた。しかし、この農法の実態はよく分からず、おそらく犂を用いない稲の直播栽培であろう」と述べ、そこから「秦嶺－淮河線以南の地域での本格的な犂耕技術の導入は、後漢末から六朝時代に発生した大量の難民や入植者達によってもたらされた」と考察している。

上述の論断について、私は以下の拙見をもっている。

①　秦嶺と淮河とを結ぶ線で中国の南北を区分する方法には、科学的な一面があるものの、絶対化はできない。特に淮河流域は、平野が広がり、水郷が連なり、交通が発達し、同一の民族が居住するため、一本の河川で隔てられた両岸地域に大きな文化的差異や犂型に顕著な区分が生まれるとは思えない。この推断に基づけば、江蘇省の後漢の画像石に描かれている三角枠型犂の分布範囲は、江南地方の江蘇南部一帯まで含まれていた可能性が大きい。

②　淮河以南の江南沿海地方には、石器時代、高度に発達した良渚文化と河姆渡文化があり、中国文明の揺籃の地の一つであった。春秋時代には、この地方に呉、越などの国が相継いで雄を唱え、社会、経済、文化が発達しており、未開で野蛮な辺境の地ではなかった。従って古代の江南を考察するにあたり、江南と華南を同様な地域と見なすべきではない。江南地方でも、高度な文明を持つ湖岸・沿海地方の平野部と「火耕水耨」に従事し「象耕烏耘」が存在する辺鄙な内陸部や山間部とを区別すべきである。

③　上述の見解が正しく、山東南部から江南東部にかけての範囲を古代のひとつの経済・文化地域であると見なせば、この地方の犂の誕生と発展のプロセスを明確に説明できる。この地方では、犂の雛形となった新石器時代の石犂（破土器とも呼ばれる）、耒、耜が多く出土しているだけでなく、中国で唯一商代の青銅製犂先（即ち明器）が発見されている。その後、漢代の画像石にはっきり描かれた牛で牽引する三角枠型直轅無床犂の実物が出現し、数百年後の唐代には、三角枠型犂をもとに中国で最も典型的かつ最後の型であるといわれる江東犂が創られた。中国における農業考古学の専門家陳文華先生は、耒と耜から三角枠型直轅犂へ、そしてさらに四角枠型曲轅長床犂へ発展したという、中国の犂の誕生と変遷に関する考証を行っている。陳先生の考証結果が必ずしも中国のすべてに当てはまるわけではないが、もし

それが淮河・江南地方の犂の進化モデルであるという見解であれば、比較的妥当な考証だと思う。河野通明先生は別の論文で大阪地方の犂は中国系の犂であると言及されているが、それは古代にこの地方から日本に伝来した可能性が大きい。

④　嶺南地方の犂耙技術は、北方乾地農法が導入され形成されたという説についても更なる考察が必要であろう。後漢の朝廷によって犂耕技術が嶺南および西南地方に積極的に導入され、その当時鉄器の使用が広く普及し、後漢以降に北方から南方への移民が大幅に増加したという見解には、疑問の余地がないと思う。しかし私の考察では、中国の西南、華南ないし東南アジア北部には、三角枠や四角枠型、短床や長床、直轅や曲轅犂が存在したものの、主要な犂型は三角枠型無床曲轅犂であった。このような犂型は言うまでもなく現地の風土に合わせて改良されたものであろうが、いつどこから伝来し、いつ改良され型が定まったのかを解明するのは容易なことではない。嶺南の「犂田耙田模型」に碌碡を使用しているケースがあると言及しているが、もしそれが石碌碡を指すということであれば、疑問である。なぜなら水田での石碌碡の使用は考え難いからである。しかし、もし乾地の砕土と穀物の脱穀に用いられていたということであれば、それは理に適った見解であろう。

⑤　地名の問題であるが、渡部武先生が報告で用いている「華北」の概念は、中国で一般に言う「華北」の概念とは異なる。論文で用いている「華北」には秦嶺と淮河を結ぶ線の以北がすべて含まれているが、中国ではその地方を「北方」と呼んでいる。北方の甘粛と陝西は「西北」であって「華北」ではない。一般に中国で「華北」という場合、それは河北省およびその周辺地区を指す。

2．金光彦「韓国の犂の形態と地域的特徴」について

金光彦先生の報告「韓国の犂の形態と地域的特徴」を拝聴して、韓国における犂文化の多彩さに感銘を受けるとともに、金先生の深くきめ細かな調査・研究に深い印象をもった。先生の報告の最大の特徴は、異なる角度から犂の分類を行っていることである。私の研究は分類を大変重視しているものの、犂型と地域の分類を行っているだけである。一方、金先生の場合は、形態と地域の分類以外にも、犂の名称、把手、犂先の角度調節法、犂先の数などに基づいて大変周到な分類を行っている。河野通明先生によると、金先生は民俗学と農具研究の大家で、その論文には金先生の学問的背景が反映されているということである。例えば、先生の犂の名称に関する分類研究には、民俗学者としてのユニークな視点が含まれているが、民俗学者ではない河野先生、渡部先生や私にはこのような研究はない。先生の収集と整理によると、韓国の犂の名称は実に67種類に及んでいる。67の名称に反映された朝鮮民族の犂に対する認知と伝統的知識は、犂研究の範疇をはるかに超えるものであり、この「非文字資料」を通して、朝鮮民族の民俗文化の一端をうかがい知ることができる。例えば金先生が挙げられた韓国中東部（江原道）、中部（京畿道北部）、中西部（黄海道）の犂の名称は、本来道具を意味するものであるが、それには男性器の意味もある。「犂を使って耕作する（操犂耕作）」と「性行為」とは同一の言葉であり、「種」には「精液」の意味が付与されている。また犂へらから落ちる土のことを「飯」という。韓国の犂の様々な名称は、物そのものの名称を表すだけでなく、シンボリックな意味も込められている。金先生の名称などに注目した分類・研究は、犂の研究を新しい領域へと広げたのである。

本セッションのテーマは「犂の形態比較から東アジアの民族移動に迫る」である。東アジアにおいて、中国と日本を繋ぐ架け橋としての韓国は、犂の研究を通して如何なる文化が融合してきたのか等の問題につい

て解明できる立場にある。これらの問題は我々が理解を深めたいと思っている内容なので、この面で新しい成果が生まれるのを期待したい。

3．河野通明「日本の犂に見られる朝鮮系・中国系とその混血型」について

河野通明先生は神奈川大学 COE プログラムにおいて犂研究のコーディネーターを務められている。先生はこれまでに 2 回日本、中国、韓国の犂の研究者を日本に招聘してシンポジウムを開催し、東アジア国際犂耕フォーラムを立ち上げ、3 カ国の学者による対話と交流を実現した。これは当該分野における国際共同研究の促進に大きな役割を果たすだろう。

私が河野先生と初めてお会いしたのは、10 年前東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所で開催されたシンポジウムにおいてである。私はその時「雲南における犂の類型と分布」と題するテーマで講演を行った。河野先生が犂の研究に着手されたのは私より 3 年早く、1981 年からである。ここ 7 年ほど、私は学内事務の仕事や他のテーマの研究に忙殺され、犂の研究が滞っていた。一方、河野先生の方は少しも手を緩めることなく、日本の犂の研究に精力を注いでこられた。大変ありがたいことに、先生は新しい論文を書かれたり新たな知見を得るとすぐに私に送って下さり、ここ 2 年ほどは続けて私を国際シンポジウムに招待し、私が研究に励むよう鞭撻し、多くことを学ばせてくれた。

河野先生の報告の特徴は、独自の風格を備え、ユニークな視点を持ち、深い学識に裏打ちされ、簡潔で要を得ていることである。限られた時間の中で、日本における犂の誕生、特殊性、形態・分類、由来、分布について述べ、非常に分かりやすい。以下のようないくつかの重要な視点は、新しいアイデアに溢れていて、大変参考になった。

① 一般に、農具は長い歴史の中で地形や土壌に合わせて絶えず改良され、現在見られるような様々な形態になったと考えられている。しかし、河野先生は異なる視点から考証や研究を行い、一部の農機具が千年以上の時を経過しても今なお元の形態を維持していることを発見した。そこから、先生はさらに研究を進め、以下のような見解を得た。即ち、消費生活用具より生産用具の方が変化しにくいこと、稲作農具では、脱穀・調製用具より耕作農具の方が変化しにくいこと、耕作農具では、人が使う鍬・鋤類より牛馬を使う犂・馬鍬の方が変化しにくいことなどである。これらの見解には大変重要な意味がある。何故なら、犂が長期間変化しにくいという特性をもつならば、20 世紀の犂の形態を比較研究することを通じ、日本における古代犂の形態や東アジアの民族移動の状況についても解明できる可能性があるからである。

② 犂の分類を重視しない犂の研究者は一人もおらず、しかも多くが分類を研究の目的にしている。一方、河野先生は「何のための分類か、分類を通して何を知りたいのか」と鋭く問うていることから分かるように。先生にとって分類は分析の手段に過ぎないのである。

③ 従来の観点では、犂の形態が風土に適応した結果、無床犂は乾地の耕作に、安定した長床犂は水田の耕作に用いられたということであった。しかし河野先生が大阪府と福岡県で行った調査結果は異なっている。福岡県では水田と畑のいずれにおいても無床犂が使われたのに対し、大阪府では水田と畑の両方で長床犂が使用されていた。その理由について河野先生は、朝鮮系の犂である無床犂が朝鮮から福岡に伝来し、中国系の犂である長床犂が中国から日本に伝来して、大阪地方でずっと受け継がれてきたと解釈している。

④　河野先生はこの解釈に基づいて犂型の新しい分類法を採用し、日本の犂を朝鮮系、中国系、混血型の 3 類型に分類した。

⑤　朝鮮犂と中国犂はいつ誰によって伝えられたか、これらの問題を考証することで、犂の研究はもはや犂自体の耕作機能の研究に留まることなく、歴史民俗研究に昇華している。言い換えれば、犂の研究を通して民族移動などの歴史事象を具体的に解明すれば、犂は用具としての犂であるだけでなく、歴史の解読が可能な価値の高い「人類文化研究のための非文字資料」になるのである。

上述の河野先生の研究方法は、確かに斬新かつ説得力に富んでいる。しかし、民族の移動と文化の伝播を研究する上で、日本は状況を理解しやすい環境にあるのに対し、多民族が混住する地域では、分析や考証がかなり困難である。しかも犂とその他の農具を特殊な「非文字資料」として位置づけるのであれば、その機能と価値はおそらく主にそれ自体と当該文化史の解読に限定されることになる。したがって、それを不適切に拡大すると、本来の範囲を逸脱することになるだろう。

以上、3 先生の報告に対し卑見を述べさせていただいた。学問を通じて友と交わるというのは、この上なく楽しいことである。不適切な点があれば、ご指摘していただきたい。